「視線気にせず街へ」

精神障害者の写真ワークショップ

主宰・小林さんが活動紹介

安心して住めるまちづくりを考える「ふれあい交流会」（宮崎市保健所など主催）が20日、宮崎市佐土原町であった。精神障害者のための写真ワークショップ「えん」を主宰する同市の写真家、小林順一さん(61)が、写真を通じて精神障害者への理解を広げてきた活動を紹介した。

小林さんは01年、当時20歳の長男が統合失調症と診断されたのを機に、入退院の繰り返しにより地域と隔絶された生活を送る精神障害者の実態を知った。

ワークショップは08年に始め、月平均2回、メンバーと市内を歩き写真を撮る。「他人の視線が気になって街に出られない人も、カメラを持つと見られる側から見る側へ意識が切り替わる」という。

小林さんは、道端の小さな花や青く澄んだ空などの写真を紹介し「撮影者の苦労や思いが反映されている。うまいへたより、自分の感性を信じて撮ることに意味がある」と説明。「偏見なく地域で生活し、自信と誇りを取り戻してほしい」と訴えた。

また、精神障害者の男性と女性が「仕事を辞めて何もすることがないのに近所の人に『どこに行くの?』と聞かれるのがつらかった」「苦しいことを味わったから普通の生活の幸せに気付いた」などと発症後の生活を報告した。

「えん」の問い合わせは宮崎もやいの会0985・71・0036へ。【川上珠実】

「写真を通して自信を取り戻して」と話す小林さん

2012年1月22日　毎日新聞